開拓使旧蔵建築関連洋書と開拓使洋風建築の意匠

開拓使旧蔵建築関連洋書に関する研究 その2

FOREIGN ARCHITECTURAL BOOKS FORMER OWNED BY KAITAKUSHI AND
THE DESIGN OF THE WESTERN-STYLE ARCHITECTURE BUILT BY KAITAKUSHI

A study on the foreign architectural books former owned by Kaitakushi Part 2

池上重康*, 角 幸博**

Shigeyasu IKEGAMI and Yukihiro KADO

As compared the architecture of Kaitakushi with illustrations of the architectural pattern books from overseas published in the middle of the 19th century, and former owned by Kaitakushi, there are robust similarities between them. First, the architectural engineers of Kaitakushi began to study the western-style architecture by copying out illustrations of the pattern books to build a house of Kaitakushi in 1873, later, they mastered the western-style architecture through the pattern books. Finally, they dealt with the illustrations as elements to compose architecture by harmonizing with the architectural skill they had cultivated. Those architecture could be said 'early western-style architecture.'

Keywords : Kaitakushi (Hokkaido Colonization Office), Pattern Book, Foreign Architectural Book, Early Meiji Era, Western-Style Architecture
開拓使, パターン・ブック, 建築洋書, 明治初期, 洋風建築

1. はじめに

前稿¹⁾では、開拓使が明治初期にアメリカおよびイギリスより、大量の建築関連洋書を購入していたことを指摘し、北海道大学および室蘭工業大学附属図書館に所蔵²⁾される、開拓使所蔵履歴のある建築関連洋書に捺印された蔵書印ならびに図書票簽から、その購入および移管の経緯を考察した。その際、開拓使関係簿書所載の目録に書名などを確認できるが、所在不明のものが数多くあることも同時に報告していた。前稿をまとめた後、市立函館図書館において開拓使関連蔵書印のある書籍を8冊確認でき、さらに、ロシアより輸入された建築図書13点のうち、8点の建築図面ならびに関連図書を、北海道大学附属図書館北方資料室（以下、北大北方資料室）において発見した。これら追加発見史料の詳細については、拙稿³⁾において報告している。

ところで、幕末から明治初期にかけての西洋建築の移植過程について、堀越三郎が3つの流れを指摘している。一つは、雇外国人建築技術者による「純西洋建築」、いま一つは、日本人大工棟梁による所謂「擬洋風建築」と呼ばれるもの、そして、外国人建築家に教育を受けた日本人建築家による「日本式西洋建築」である⁴⁾。しかし、明治初期の中央官庁営繕組織による庁舎建築などは、2つ目にあげる「擬洋風建築」の範疇に含まれながらも趣を異にすることが、関野克をはじめとして様々な研究者により指摘されている⁵⁾。この

組織としておもだった建築活動をあげることができるのが、林忠恕(1835-93)の所属した大蔵省ならびに工部省営繕と、安達喜幸(1827-84)の所属した開拓使営繕である。村松貞次郎は、開拓使の営繕事業について「奇妙な和風意匠を強引に取りつけたり、和洋折衷を表面化したりする点がきわめてすくない。これは(中略)明治初期の官僚技術者の設計に共通したところである」⁶⁾と、意匠面において、所謂「擬洋風建築」とは一線を画するとともに、両者の共通性を指摘する。越野武は、「開拓使の洋風建築は、大蔵省—工部省営繕局(寮)による明治初期の中央官衙の建設に対応」⁷⁾と、両者の組織的対等性を指摘し、明治初期の開拓使の建築に「初期洋風建築」という言葉を与えている⁸⁾。

また、遠藤明久は、『開拓使営繕事業の研究』中、建築関連洋書の存在を指摘した上で、「彼等(開拓使営繕技術者:引用者註)の洋風建築摂取経路として、建築関連洋書の比重はかなり大きいとみることができるし、そこに、官庁技術者だけに許された技術摂取上の優位性があり、彼等の作品を、他の地方型洋風建築、いわゆる「奇妙な作品」と区別する技術的な基盤があったのではなかろうかと思うのである」⁹⁾とまとめている。筆者らは、開拓使旧蔵の建築関連洋書の他に、内閣文庫旧蔵洋書の中においても、明治初期に日本政府の各省庁が購入した建築関連洋書を多数確認している¹⁰⁾。遠藤の論考を敷衍すると、明治初期の官庁営繕による洋風建築は、建築洋

本稿は、平成16年度日本建築学会大会学術講演梗概集で発表したものに、大幅に加筆、再構成したものである。

* 北海道大学大学院工学研究科 助手・工修

** 北海道大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., M. Eng.

Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

書を媒体として学習したものの結果であろうことが推察される。

そこで本稿では、北海道大学附属図書館貴重資料室内札幌農学校文庫（以下、農学校文庫）・室蘭工業大学附属図書館土木専門文庫（以下、土木専門文庫）・市立函館図書館（以下、函館図書館）所蔵の開拓使旧蔵建築関連洋書、特にパターンブック（建築雛形書）を基礎史料として、細部意匠を中心に、パターンブック掲載図版と開拓使洋風建築の意匠を比較し、具体的な参照の事例を示しながら、開拓使営繕技術者がパターンブックを媒体として「西洋建築」を習得し、「初期洋風建築」を完成させた様子を考察することにした。なお、意匠と並んで開拓使期の建築に特徴的な「バルーンフレーム」構法の導入など、技術面での参照については、別稿にて報告したい。

2. パターンブックとしての建築関連洋書

2-1 アメリカにおけるパターンブック研究

アメリカにおけるパターンブック研究は、近年盛んに行われるようになってきている。中でも Ames and McMlelland, *National resister bulletin, Historic residential suburbs*.¹¹⁾ は、その全体像がよくまとめられており、1830 年代から 1890 年にかけての鉄道・馬車鉄道郊外 Railroad and Horsecar Suburbs の進展に影響を与えたものとして、バルーンフレームの発明とともに、パターンブックの存在をあげている。日本においては、奥出直人『アメリカンホームの文化史』¹²⁾、市原出『リビングポーチ』¹³⁾ などにおいて、同様の視点での記述を見ることができる。また、Urban design associates, *The architectural pattern book*.¹⁴⁾ では、パターンブックをウィトルウィウスに始まり、アルベルティ、セルリオ、パラーディオの流れを受けるものとして、一節を設け 'Early American pattern book' を概説している¹⁵⁾。

2-2 開拓使旧蔵建築関連洋書の概要

開拓使旧蔵の建築関連洋書の中には、19 世紀後半当時のアメリカにおいて流行していた住宅建築書やパターンブックを多く見ることができる。開拓使の建築様式のひとつに同時代のアメリカで流行していたピクチュアレスク、あるいはカーペンター・ゴシックを見ることができるのは、これら書籍の存在が関連することは疑いない。

前述のパターンブック研究書では、アメリカにおけるカーペンター・ゴシックによる郊外住宅居住流行の要因の一つとして、ダウニング Downing, A. J. の住宅実用書を挙げている。特に、*The theory and practice of landscape gardening*. 1841, *Cottage residences*. 1842, *The architecture of country houses*. 1850 の 3 冊は「当時のアメリカ人の住まいと住宅地のデザインの原型を決定した」¹⁶⁾ とまで言われる。開拓使旧蔵洋書の中には、この 3 冊のうち前 2 者があり、さらに同じダウニングの著作 *Hints to persons about building in the country*. 1859 も所蔵されている。中でも *The theory and practice of landscape gardening*. は 3 冊の存在が確認される。その他、ダウニングと親交の深かった、ヴォウ¹⁷⁾ Vaux, Clavert の *Villas and cottages*. 1874 や、住宅に関する多くの著書を残したラウドン Laudon, John、ウッドワード Woodward, Geo. E. の著書も数点所蔵する。これら書籍には図版が豊富に掲載されており、たとえ英語が読めなくとも、図版を参照するだけで建築が可能であるほどの情報量を持つ。事実、図版が多く掲載される書籍ほど痛みが激しく、表紙やページが欠損しているもの、表紙を製本し直したものもある。各ページも頻繁に捲

たであろう手垢の痕跡、墨書の汚れ、鉛筆による書き込みが見られる。トレースした線刻の痕跡や、立面図を鉛筆デッサン風に模写した美濃紙が挟まれているものもある。貪欲なまでに洋風建築を学習したであろう様子をうかがうことができる。

レオナルド・ベネヴォロ Benevolo, Leonardo は『近代建築の歴史(上)』の中で、19 世紀後半のアメリカにおいて人気があった本として M・ラフェーヴァの『近代建築の美』を挙げている¹⁸⁾。Lafever, Minard, *The beauties of modern architecture*. 1855 もまた、開拓使旧蔵書であり、精細なオーダーや柱頭装飾の図版を多数掲載している。

3. 開拓使建築の洋風要素

3-1 日本人研究者による考察

冒頭にも述べたように、建築史研究者の間では、開拓使の建築には同時代的な所謂「擬洋風建築」の範疇に含むことのできないものが多いことが指摘されてきた。

村松貞次郎は、『明治の洋風建築』の巻末で「明治洋風建築系統図」を掲げ、開拓使の建築を「擬洋風建築」の流れとは異なる、長崎・神戸などの居留地の建築と併置する¹⁹⁾。また、清水重敦は「ケブロンを代表とするアメリカ人顧問団が加わり、その指導の元に古典主義をまとった木造下見板コロニアルが導入された」と述べ、「様式的には徹底したアメリカ化が図られ」たと結論づける²⁰⁾。皆一様に、明快な根拠を示すことなく、開拓使による建築のアメリカ的傾向を、アメリカ人雇技術者の指導によるものとまとめている。

また、藤森照信は、開拓使の建築様式にコロニアル、ジョージアン、ネオクラシカル、ゴシックリヴァイヴァル、ヴィクトリアン、カーペンターズゴシックを見いだすとともに、「指導に当たったアメリカ人技術者の中にちゃんとした建築家が一人もおらず、土木技師の建築的素養やアメリカから運ばれた多くの建築参考書の図版に頼ってデザインが進められた結果と思われる」と、開拓使の日本人建築技術者が建築洋書を参照した可能性を指摘する²¹⁾。遠藤や越野も、同様の視点で、アメリカから輸入した建築関連洋書をコピーした、即ち、パターンブック掲載の図版を模写した可能性を指摘²²⁾ しているが、事例は明示されていない。

3-2 アメリカ人研究者による考察

開拓使による建築が端正な「西洋的」要素を持っていることは、日本人研究者に限らず、アメリカ人研究者もまた指摘している。デビッド・スチュワート Stewart, David B. は、*The making of a modern Japanese architecture*. の中で、開拓使本庁舎（1873 年建築）を指して 'the most sophisticated' (もっとも洗練された) と表現²³⁾ し、ダラス・フィン Finn, Dallas もまた、*Meiji revisited*. において、同時代のアメリカの連邦議会議事堂、市庁舎あるいは裁判所にインスピレーションを得たものと評価し、ネバダ州議会議事堂に驚くほど類似すると記述する。さらに、開拓使工業局庁舎（1877 年建築）の意匠について 'almost as American as apple pie' (ほとんどアメリカそのものといってもいいほど) とも言い表している²⁴⁾。

特に、フィンが前掲書の中で、開拓使による各々の特徴的な建築に対して、札幌農学校文庫蔵書中の図版と比較しながら、そのデザインモチーフを考察している。以下、フィンが指摘する類似図版例を示しながら、筆者らが確認できた具体的なパターンブック参照の

様子を考察していくことにしたい。

4. 開拓使洋風建築の意匠とパターンブック

設計図面あるいは写真を入手できる開拓使の主要建築を抽出し、そこに用いられている意匠と、パターンブック掲載の図版との照合を行なった(表1)。開拓使洋風建築に一致または酷似する図版は Cummings & Miller, *Architecture*. 1868 と Woodward, *National architect*. 1869 の2冊を中心に確認できた。この2冊は、大型のパターンブックで、建築基本図面の他に、詳細図も多数掲載しているものである。中には仕様 specification が記載されているものもある。このことは、開拓使営繕技術者がパターンブック掲載の図版を模写した、あるいはモチーフに建築を構成したことを示す証といえる。

類似例として、全体構成を Sloan, *City and suburban architecture*. 1867 や Bicknell, *Village builder*. 1870 に、住宅の外観および平面を Woodward, *Cottage and farm house*. 1867, Hussey, *National cottage architecture*. 1874, Downing, *Cottage residences*. 1873, Thomas, *Rural affairs*. Vol. 1-7. 1873-77, Wheeler, *Homes for the people*. 1867, Todd, *Country homes*. 1870 に、開口部の建具を Bicknell, *Village builder*. に、破風・持ち送り・棟飾りなどの細部意匠の類似例の図版を Hussey, *National cottage architecture*. 1874 と Vaux, *Villas and cottages*. 1874 に確認できた。また、Thomas, *Rural affairs*. と Waring, *The handy-book of husbandry*. 1870 には、畜舎建築が多数掲載されている。

4-1 開拓使本庁分局庁舎(1873年)

開拓使本庁分局庁舎については、これまで、北方資料室所蔵の「正面之図」と表題のついた立面図1葉(図1)と、正面やや左斜めから撮った写真(図2)が知られていた。桐敷は、破風飾り、張出窓、ベランダに着目し、アメリカ系ピクチュアレスク木造住宅の影響を指摘²⁵⁾し、越野もまた「同時代のアメリカで盛行したピクチュア

図1 「正面之図」開拓使本庁分局正面図
(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)

図2 開拓使本庁分局(1873年)
(北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)

図3a Design No. 15. 'Front Elevation'

図3b Design No. 15. 'Side Elevation'

図3c Design No. 15. 'Ground Plan'
(Woodward, *National architect*.)

表1 開拓使洋風建築と建築洋書掲載図版との照合

竣工年	建築名称	全体		詳細					
		Elev.	Plan	Door	Window	Gable	Bracket	Finial	Stair
明治6年 (1873年)	開拓使本庁舎	○	○	○	○	○	○	○	○
	開拓使本庁舎附属舎					○			
	開拓使本庁分局庁舎	○		○	○	○	○	○	○
	勸業邸	○	○	○	○	○	○		
	大主典邸、小主典邸	○	○	○	○	○		○	
	史生邸		○	○	○	○			
	洋造式邸		○	○	○			○	
	西洋町長屋				○				
明治8年 (1875年)	札幌病院			○	○				
	札幌農学校寄宿舎				○				
明治10年 (1877年)	札幌農学校模範家畜房	○			○	○	○	○	○
	開拓使工業局庁舎	●	○		○	○	○	○	○
明治11年 (1878年)	札幌農学校演武場	○	○		○	○	○		
	爾志通洋造家			○				○	
	真駒内牧牛場家畜房	○							
明治12年	札幌農学校家畜房増築	○							
明治13年 (1880年)	水木清華亭				○	○	○	○	
	豊平館	●			○	○	○	○	
明治13年頃	永山武四郎邸			○	○	○			
明治15年	札幌博物館				○	○	○	○	
明治22年	札幌農学校北講堂				○	○	○	○	

凡例 ○：形状が一致または酷似するもの ○：類似するもの

●：Finn, Meiji revisited. で類似を指摘しているもの

空欄は、パターンブックに類似例が確認できなかったもの

レスクな木造建築のスタイル — Carpenter Gothic — を忠実に写したものにほかならない²⁶⁾と、極めてアメリカ的な意匠によりまとめられていることを指摘している。

筆者らは、上記の立面図と寸分違わない図版を、土木専門文庫所蔵の Woodward, *National architect*. 掲載図版中において発見した(図3a)。同書の Design No. 15 には 'Front Elevation', 'Side Elevation' (図3b), 'Ground Plan' (図3c), 'Chamber Plan', 'Details' (図3d), 'Details of Staircase' の6枚の図版が掲載されている。建築基本図面としては、一軒の家を建て得るに足る図面内容である²⁷⁾。

開拓使図版と洋書の 'Front Elevation' を詳細に比較すると、開拓使版には陰影と背景の森の描き込みがなく、図面左に描かれた矩計図に寸法記入がない程度で、細

部の描き込みまで全く同じである。何より、両者のスケールを合わせて重ねると一致する。このことは、開拓使の営繕技術者が、この洋書の図版を縮尺こそ違うものの模写したことを証明する。

しかし、実際の建築の際には若干の設計変更がなされたようである。外壁が平滑な仕上げから下見板に、玄関ポーチおよび側面バルコニー手摺に見られる輪繋ぎ装飾 guilloche が、轆轤引きの手摺子 balustrade に変更され、窓建具には横棧が追加される。屋根棟に2本立つ煙突は、建築用石材の未調達²⁸⁾から貧弱な陶管あるいは鉄板と思われるものに変更されたのであろう。しかしながら、全体には原設計のイメージを損ねない完成像となっている。写真からうかがえる側面を、'Side Elevation' と比較すると、破風まわりの濃やかな意匠だけでなく、背後に延びるヴェランダの存在も確認できる。

平面に関しては、「本庁御構内見取縮図」²⁹⁾(図4)の右上(北西)角に確認できる概形が、'Ground Plan' とほぼ同形であることがわかる。『開拓使事業報告第二編』の「家屋表」³⁰⁾によれば、建坪は59坪とあり、'Ground Plan' から算定できる建築面積よりも若干大きい。間取りあるいは内部意匠まで、Design No. 15 を模倣したかどうかは、史料の不足により残念ながら特定できない。

4-2 札幌女学校講堂並教師館(1875年)

札幌女学校は1872年建築の純和風であった脇本陣を洋風に改造(図5)し、さらに木造2階建ての講堂並教師館(図6)を増築して、1875年に開校した³¹⁾。

本庁分局庁舎の2年後の建築であるが、破風飾り、持ち送りを始めとする細部意匠、ならびに全体構成が本庁分局庁舎、即ちパターンブックのデザイン(図3d)を踏襲している(図7, 8)。さらに階段(図9)は、函館図書館所蔵の Cummings & Miller, *Architecture*. 掲載の図版(図10, 'Fig 1. ') にほぼ一致する。ちなみにこの札幌女学校関連の図面すべてに「あだち」の捺印を確認できる。開拓使営繕技術者の安達喜幸が描いた考えるのが妥当であろう。本庁分局における模倣から、パターンブック掲載図版を「模写」ではありながらも、難形として扱っていく過程を見て取れる。

4-3 開拓使工業局庁舎(1877年)

開拓使工業局庁舎(図11)に対し、フィン、ペンキ塗りの下見板、シングル葺の寄棟屋根、フード付きの上下窓、そして軒下の持ち送りを例にあげ、その全体構成とデザインは19世紀中葉のアメリカ建築の強い影響が見られると指摘し、さらにこう続ける³²⁾。

The familiar porch, for example, seen on many Kaitakushi buildings, including the Industrial Office, which Adachi helped build and used as his headquarters, appeared in Woodward's sketches for "a farm cottage."

開拓使工業局(を含む開拓使の建築)の玄関ポーチ(図12)は一般的で、ウッドワード Woodward のスケッチ(図13)に見られるという。しかし、棟飾りに関しては 'the finial on the porch roof and those at either end of the ridgepole were not quite American.' (ポー

図 3d Design No. 15. 'Details'
(Woodward, National architect.)

図 4 「本庁御構内見取縮図」部分
(北海道立文書館所蔵)

図 5 開校式当日の札幌女学校教生徒達
(北大北方資料室所蔵)

図 6 開拓使札幌女学校講堂並教師館
(北大北方資料室所蔵)

図 7 「女学校講堂並教師館」正面図
(北大北方資料室所蔵)

図 8 「女学校講堂並教師館」側面図
(北大北方資料室所蔵)

図 9 「女学校講堂梯子之図」
(北大北方資料室所蔵)

図 10 Plate 44. 'Fig 1.,' 'Fig 2.'
(Cummings & Miller, Architecture.)

チ屋根上の棟飾り、および棟木両端にある棟飾りは極めてアメリカ的ではない)とも指摘する。

Cummings & Miller 前掲書掲載図の中には、開拓使工業局庁舎の玄関ポーチ破風板(図14)、軒下持ち送り(図15, 16)とほぼ一致する図版がある。棟飾りに関してはフィンの指摘とは異なり、類似する図版(図17)があった。パターンブックからの「模写」に限らず、若干のアレンジを加えつつ、全体構成から細部意匠に至るまで、極めてアメリカ的な建築を構成することに成功した事例である。

4-4 豊平館(1880年)

豊平館(図18)について、藤森は、半円形の手寄せを19世紀中葉のグリークリヴァイヴァイルの影響とし、軒下の持ち送りをカーペンターズゴシック風と考察する³³⁾。フィンもまた手寄せに着目し、以下のように述べている³⁴⁾。

There is striking similarity between Adachi's hotel and designs by two American architects Calvert Vaux's "Wooden Villa with Tower" and Samuel Sloan's "Villa in Italian Style"

安達のホテル(豊平館:筆者註)と、2人のアメリカ人建築家

ヴォウ Vaux とスローン Sloan のデザインには顕著な類似が見られるという。その具体例として、札幌農学校文庫蔵本である Vaux, *Villas and cottages*. 1867 と Sloan, *Architectural review and American Builder's guide*. 1869 の2冊に掲載されている図版をあげるが、後者は札幌農学校文庫には含まれていない。

"Wooden Villa with Tower"(図19)は、木造2階建て下見板張りで、正面中央には半円形の手寄せを構え、セグメントアーチの破風を見せる。基本構成は豊平館のそれに類似する。大胆ともいえるこの構成を、建築洋書からの影響と決めつけるには若干のためらいを感じるが、筆者らは、豊平館における具体的な「模倣」の事例をここで指摘したい。

同時代の明治建築において、豊平館手寄せの柱頭装飾(図20)ほど、そのプロポーションの端正さを見るものは他にない。この柱頭と非常によく似た図版(図21)を、Lafever 前掲書に見ることができる。フルーティングの本数、玉縁 astragal の形状と、その上にある舌状花卉、さらにアカンサスの葉と花飾 fleurion の取り付け方まで酷似する。洋書図版ではその上に棕櫚型の装飾を施すが、豊平館ではアカンサスの葉を互い違いに重ねる。これまで見てきた「模倣」から

図11 開拓使工業局庁舎
(北大北方資料室所蔵)

図12 開拓使工業局庁舎部分
(北大北方資料室所蔵)

図13 "a farm cottage,"
(Woodward, *Cottages and farm houses*.)

図17 Plate 29, 'Design C'
(Cummings & Miller,
Architecture.)

図14 Plate 30, 'Fig.3'
(Cummings & Miller,
Architecture.)

図15 開拓使工業局庁舎持ち送り
(北大建築史研究室所蔵)

図16 Plate 37, 'Fig.1'
(Cummings & Miller,
Architecture.)

図18 豊平館(筆者撮影)

図19 'West Elevation'
(Vaux, *Villas and cottages*.)

図20 豊平館手寄せ柱頭
(筆者撮影)

図21 'Design for a Capital'
(Lafever, *The beauties of
modern architecture*.)

さらに進んで、洋書の図版を理解し、習得した上で、プロポーションに破綻を来すことなく各部位を構成したといえる。

豊平館工事の特異な仕様の一つに、大理石模様の漆喰塗がある。暖炉の仕上げに用いられているもので、木村勉は「大理石のかわりに、伝統技術である漆喰塗を応用して大理石らしく見せる方法が考案された。これを擬洋風化の典型として扱うことはたやすい(傍点:引用者)」³⁵⁾と述べる。しかし、開拓使旧蔵書である Whittock, Nathaniel, *The decorative painters' and glaziers' guide*. 1841 には、木材に塗装する擬似大理石仕上げ *imitating mables* の手法が解説されている。この書籍を参考に、大理石模様の漆喰塗が考案された可能性も、強ち否定できないであろう。

4.5 その他のパターンブックの模倣事例

開拓使本庁舎(1873年)においても、パターンブックからの模倣が確認できる。一つは1階の一般窓(図22, 23)であり、腰下パネル装飾が異なる程度で、額縁形状、窓棧ともにほぼ一致する。いま一つは階段(図24)で、図10に示した'Fig 2.'を模写したと考えると間違いのないであろう。開拓使本庁舎の背後には、2棟の附属舎(図25)が建っていた³⁶⁾。その妻面の破風板は、図14の下図'Fig

5.'と同一のものである。また、同じ図14の上図'Fig 2.'とほぼ同じ破風飾りを、勅奏邸(1873年)の玄関屋根(図26)に見ることができる。時代は下り、開拓使廃止以後に建築された札幌農学校北講堂(1889年)においても、玄関破風(図27)のデザインとして、パターンブック掲載のピクチュアレスク風のレース模様の破風(図28)を使用していた。

永山武四郎邸(1880年頃)の和室と洋室を繋ぐ箇所を開く引き分け戸の額縁装飾(図29)と同じ形状の額縁デザイン(図30)もパターンブックに確認できた。

最後に、どの建築のものかは不明であるが、北大北方資料室所蔵の開拓使関連文書に含まれていた、持ち送りとポーチ手摺の図面3葉(図31a, b, c, d)について見ていきたい。図面左には2種類の持ち送りデザインが描かれている。パターンブックによく見られる持ち送りの曲線を、図31bではエスキスし、新たな曲線を模索している。このようなエスキスの様子は、この図面に限らず、棟飾りの線などでも少なからず見ることができる。

ポーチ手摺のデザインは三者三様であるが、いずれも雲形鋸 *scroll saw* を用いてつくるカーペンターゴシックに特徴的なデザイン³⁷⁾をみせる。しかしながら、最終的には図31cのように、多く

図22 開拓使本庁舎
1階一般窓
(北大北方資料室所蔵)

図23 Plate 13, 'Fig 4.'
(Cummings & Miller, *Architecture*.)

図24 「本庁舎高欄」
(北大北方資料室所蔵)

図25 開拓使本庁附属舎部分
(北大北方資料室所蔵)

図26 勅奏邸玄関部分
(北大北方資料室所蔵)

図27 札幌農学校北講堂部分
(北大北方資料室所蔵)

図28 Plate 29, 'H'
(Cummings & Miller, *Architecture*.)

図29 永山武四郎邸額縁
(筆者撮影)

図30 Plate 45, 'D'
(Cummings & Miller, *Architecture*.)

図31a 持ち送りとポーチ手摺
(北大北方資料室所蔵)

図31b 持ち送りとポーチ手摺
(北大北方資料室所蔵)

図31c 持ち送りとポーチ手摺
(北大北方資料室所蔵)

図31d 図31cの裏面

の建物で用いてきた轆轤引きの手摺子に落ち着いたようである。

なお、農場の畜舎建築において、農業書掲載図版にほぼ一致するものや、あきらかに参照にしたであろう事例を確認しているが、これらの詳細については、バルーンフレーム構法など技術的側面からの考察と合わせて、改めて報告することにした。

5. むすび

札幌には、未だ原野が広がっていた1872年、安達喜幸をはじめとする開拓使の営繕技術者達は、本府建設のため、東京から札幌へ居を移した。本稿で考察してきたように、1873年に竣工する多くの建築には、アメリカから購入したパターンブックの模倣が見てとれる。つまり、開拓使において初期に購入したパターンブックは、営繕技術者とともに、東京から札幌へ移送され、本府建設に大いに役立ったことになる。雇外国人技術者の指導があったとはいえ、建築を専門とする技術者は一人もいない状況である。開拓使顧問のケブロンあるいは、開拓使次官黒田清隆の提言により、洋風の都市を建設することが必須であったことも、その背景として見逃せない。否、パターンブックという裏付けがあるからこそ、開拓期のアメリカを範に、このような政策を推進できたのかもしれない。結果として、開拓使営繕技術者達は、パターンブックを頼りに、現代のアメリカ人が見ても遜色のない「アメリカ式」の建築を造りあげた。

開拓使旧蔵のパターンブックには、手垢、墨書あるいは鉛筆など、130年前の営繕技術者達の努力の跡がありありと残っている。開拓使本庁分局庁舎に見るように、最初は全くの模倣建築を造ることから、彼らの「西洋建築」の学習は始まった。次いで、パターンブックに掲載の図版を個々の部位に切り離し、雛形として扱っていく。

数多の図版を組み合わせることで建築が構成され、逆に建築の様式が部位ごとに解体され雛形として自立する。このことは洋の東西を問わず19世紀後半という時代において、同時代的な傾向であった³⁸⁾。こうした背景、そして営繕技術者の高い建築技術があったからこそ、西洋の建築様式・技術の移植・融合が可能であった。

これまで、開拓使洋風建築には、同時代的な擬洋風の建築要素が目立たないとされてきた。本稿で考察したパターンブックの意匠を参照して組み立てられた洋風建築こそ、北海道における「初期洋風建築」であるといえる。

〔註記〕

- 1) 池上、角『開拓使旧蔵建築関連洋書の購入と移管経緯について 開拓使旧蔵建築関連洋書に関する研究 その1』(日本建築学会計画系論文集 第573号、2003年11月)、pp.147-154。
- 2) 北海道大学附属図書館閉架書庫ならびに貴重資料室、室蘭工業大学附属図書館土木専門文庫。
- 3) 池上、角、皆川雄一『開拓使函館支庁旧蔵ならびに函館図書館所蔵建築史料について 開拓使旧蔵建築関連洋書研究 その1』(日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道、2004年)、pp.419-420。
- 4) 堀越三郎「洋風模倣建築六十年記」(『建築と社会』1930年6月)、pp.17-25。
- 5) 関野克「明治、大正、昭和の建築—日本建築の近代化—」(『世界美術全集 25 日本IV』、1951年)、pp.8-18など。なお「擬洋風」という言葉と、この言葉が含む諸問題については、古くは近藤豊『明治初期の擬洋風建築の研究』(私家版、1961年、理工学社から1999年に出版)などがあり、近年では、清水重敦『擬洋風建築』(『日本の美術』No.466、至文堂、2003年)で考察されている。
- 6) 村松貞次郎『日本近代建築史ノート』(世界書院、1965年)、pp.

- 76-77。
- 7) 越野武『北海道における明治初期洋風建築の研究』(北海道大学図書刊行会、1993年)、p.134。
- 8) 越野前掲書、pp.8-11。越野は当初「米国風」という言葉を用いているが、前掲書中では「初期洋風建築の基本的性格を論じたもの」として、「初期洋風建築」の前段において使用した用語と位置づけている。
- 9) 遠藤明久『開拓使営繕事業の研究』(私家版、1961年)、p.292。
- 10) 池上、角『内閣文庫旧蔵明治初期日本政府購入建築関連洋書について』(日本建築学会学術講演梗概集(近畿)、2005年)で、内閣文庫旧蔵の大蔵省、内務省関連の図書について報告している他、文部省購入の図書を国立国会図書館において多数確認している。
- 11) Ames, David L. and McClelland, Linda Flint, *National resister bulletin, Historic residential suburbs*. 2002. なお、当紀要はWeb Siteでのみ入手できる。http://www.cr.nps.gov/nr/publications/bulletins/suburbs/INDEX.htm
- 12) 奥出直人『住まい学体系 012 アメリカンホームの文化史 生活・私有・消費のメカニズム』(住まいの図書館出版局、1992年)。
- 13) 市原出『住まい学体系 082 リビングポーチ アメリカ郊外住宅の夢』(住まいの図書館出版局、1997年)。
- 14) Urban Design Associates, *The architectural pattern book, A tool for building great neighborhoods*. Yew York & London, 2004. pp.12-33.
- 15) Urban design associates, op. cit., pp.12-33.
- 16) 奥出前掲書、p.43。
- 17) 市原前掲書では、綴りのとおり「ヴォークス」と表記しているが、前稿(註記1.参照)で記載したように、開拓使における記述が「ヴォウ」であるので、本稿ではこちらに従った。
- 18) レオナルド・ベネヴォロ(武藤章訳)『近代建築の歴史 上』(鹿島出版会、1978年)、p.237。
- 19) 村松貞次郎編『近代の美術 20 明治の洋風建築』(至文堂、1974年)、pp.104-105。
- 20) 清水前掲書、p.38。
- 21) 藤森照信『日本の近代建築(上) —幕末・明治—』(岩波新書、1993年)、pp.36-43。
- 22) 遠藤前掲書ならびに越野前掲書。
- 23) Stewart, David B., *The making of a modern Japanese architecture. 1868 to the present*. Tokyo & New York, Kodansha International, 1987. p.31.
- 24) Finn, Dallas, *Meiji revisited. The sites of Victorian Japan*. New York & Tokyo, Weatherhill, 1995. p.53.
- 25) 桐敷真次郎『明治の建築 建築百年のあゆみ』(日本経済新聞社)、p.77。
- 26) 越野前掲書、p.162。
- 27) 国立公文書館(旧内閣文庫)には同年刊行の同書の別版が所蔵されている。この図書には開拓使旧蔵書には見られない、この建築の‘Carpenters’ specification’(仕様書)が掲載されている。
- 28) 札幌で建築用石材が発見され、採掘が始まるのは1875年以降のことである。
- 29) 『明治六年 開拓使公文録 建築之部』簿書5757、北海道立文書館所蔵。
- 30) 大蔵省編『開拓使事業報告第二編 勸農・土木』(1885年)、pp.669-767。
- 31) 札幌女学校は開校のわずか8ヶ月後に廃止となる。その経緯は『北大百年史 通説』(1982年) pp.26-27に詳しい。
- 32) Finn, op. cit., p.57.
- 33) 藤森前掲書、p.41。
- 34) Finn, op. cit., p.60.
- 35) 木村勉『建築修復学双書 近代建築解体新書 修復の計画と技術』(中央公論美術出版、1994年)、pp.183-187。
- 36) 南側の附属舎は湯呑所並小使溜。北側の附属舎は厳密には鞘堂で、内部には煉瓦造の御金蔵と御書籍蔵が入っていた。
- 37) Walker, Lester, *American shelter*. rev. ed., New York, The Overlook Press, 1997. p.130.
- 38) 中谷礼仁は「ひながた主義との格闘」(『カラー版日本建築様式史』美術出版社、1999年、pp.127-154)において、「ひながた」をキーワードに主に和風意匠について同様の論考を展開している。

(2005年7月8日原稿受理、2005年9月21日採用決定)